

夢は告げる : テュルク口承文芸における夢のモチーフ

著者	坂井 弘紀
雑誌名	表現学部紀要
巻	20
ページ	19-37
発行年	2020-03-11
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00004756/

夢は告げる

— テュルク口承文芸における夢のモチーフ

坂井弘紀

— 要旨

テュルクの口承文芸において、夢は、神話、伝説、英雄叙事詩、昔話など、ジャンルを問わず、きわめて大きな役割を果たしている。ここでは、夢にまつわる伝承、逸話、その解釈について、実例をあげながら、テュルク口承文芸における、夢の果たす役割とその特徴について考えていく。

テュルクの民間伝承では、歴史上の英雄にまつわる夢は、誕生や武勲、死去について告げる。その際、夢の中に聖者・賢者が現れることもあり、夢は側近や夢占い師、長老によって解釈される。英雄叙事詩では、英雄の誕生やその登場、難問の解決方法を、その家族や関係者、愛馬が夢を通じて知る。昔話のジャンルでは、夢を売買したり、見つけたりするという行為も見られる。語り手になるきっかけは夢のお告げであるという事例も少なくない。そして、山や鳥、へびや竜などがしばしば夢解釈の重要なアイテムとされ、民間伝承のストーリーにも登場する。夢解釈はテュルク口承文芸の一ジャンルを成し、現在でも人々のあいだで利用されている。

はじめに

ウラル地方、ロシア連邦のバシコルトスタン共和国の主要民族バシコルト（バシキール）人のあいだに、「バシコルトはどこから来たか」という伝承がある。かつて、あるテュルクの人が夢を見た。その夢で、ある人が「ここから東へ向かって行きなさい。オオカミに出会うから、そのオオカミが止まったところで、あなたも止まりなさい」と命じる。その通りにして、オオカミに導かれたのが現在のバシコルトスタン地方であるという。夢のお告げによって、彼らは現住地にやってきたというのである⁽¹⁾。夢はひとつの民族を移住させる力をもっているのだ。

テュルクの口承文芸において夢は、神話、伝説、英雄叙事詩、昔話など、ジャンルを問わず、きわめて大きな役割を果たしている。「夢占い」という独立したジャンルさえ存在する。本稿では、夢にまつわる伝承、逸話、その解釈について、実例をあげながら、テュルク口承文芸における、夢の果たす役割とその特徴について考えていきたい。

1. 夢と歴史的英雄

ユーラシアの歴史で活躍した英雄たちがさまざまな夢を見て、それを解釈したという逸話は数多い。この章ではまず、歴史的な、あるいは歴史上実在した「英雄」たちの見た夢とその解釈をいくつか取り上げよう。これらはまず史実ではないだろうが、人々が彼らをどのようにとらえていたかを知るためのよすがとなろう。

まず、オグズ・カガンの夢である。オグズ・カガンは、西アジア地域にまで展開し、のちのセルジューク朝やオスマン朝を興すテュルク諸族の祖と伝えられる人物である。テュルクには、この伝説的な始祖にまつわる建国神話が残る。15世紀に書き記されたこの伝承では、オグズに仕える賢者が金の弓と銀の矢の夢を見る。(以下、二重下線は夢の内容、一重下線は解釈の内容、もしくは現実の動き、破線下線は解釈者・占い師を示す。)

【伝承 1】

オグズ・カガンのそばには、白いひげで灰色の髪の経験豊富な、ひとりの老人がいた。賢く品の良い人だった。オグズの側近だった。名をウルグ・テュルク⁽²⁾といった。ある日、夢の中で金の弓と銀の矢を見た。この金の弓は、東から西まで達した。また、銀の矢は、北の方に飛んでいった。眠りから覚めると、夢で見たことをオグズ・カガンに伝えた。「ああ、わがカガン陛下よ、万歳！ 夢で神 Tengri が『手にした土地を汝の子孫に与えさせよう』と知らせたことが現実のものとなりますように」。オグズ・カガンは、ウルグ・テュルクの言葉を気に入り、彼に助言をもとめ、その助言にしたがって行った。それから、朝になると、息子たちを呼んで、「余の心は狩りを欲しておる。だが、年老いたので、勇敢な力がもうない。日よ、月よ、星よ、日の出の方向へ行け。天よ、山よ、海よ、日の入りの方向へ行け」と命じた。それから三人は日の出の方向へ、三人は日の入りの方向へ出発した。日と月と星はたくさんの獣と鳥とを狩ったあと、道中、一張の金の弓を見つけ、もってきて、父に渡した。オグズ・カガンは気に入って、微笑みながら、その弓を三つに折り、「兄たちよ、弓はおまえたちのものだ。矢を天に向かって射るのだ」といった。天と山と海はたくさんの獣と鳥とを狩ったあと、道中、三本の矢を見つけ、もってきて、父に渡した。オグズ・カガンは気に入って、微笑みながら、矢を三人に分け、「弟たちよ、矢はおまえたちのものだ。弓が矢を射た。おまえたちも矢のようになるのだ」といった。それから、オグズ・カガンは大会議を招集した⁽³⁾。

物語は、この後、オグズ・カガンが息子たちに国を譲ることを宣して終わる。白髭の老人が見た夢のとおり、金の弓と銀の矢が見つかり、それらが息子たちへの国譲りの象徴となっている。弓や矢を息子たちに分け与える場面は、騎馬遊牧民の統治者が死の直前に息

子たちに矢や槍などの武器を折って、兄弟の団結の重要性を説くモチーフと関係があるだろう⁽⁴⁾。

では、息子たちが狩りに出て、獣や鳥を父に献上したことには、どのような意味があるのだろうか。もちろん、狩りが征服活動の象徴や喩えであると単純に考えることが可能ではある。しかしながら、ここで参考になる資料がある。著名な探検家にして研究者であるオーレル・スタイン (1862-1943) が、1907年、敦煌の千仏洞で発見した古い文書である『占いの書』Yrq Bitig と称されるこの文書は、口承文芸の伝統の色濃い騎馬遊牧系のテュルクの人々が書き記してきた文字資料が多くない中で、テュルクの占いや神話学の研究上、たいへん貴重なものである。『占いの書』は、テュルク文字で記されており、9-10世紀の寅年に記されたと考えられる、65項目の文章からなる、占いの解釈のための書物である⁽⁵⁾。その、第63番には「ハンの軍隊が狩りに出た。獣を駆り集め、捕らえた。ハンは（それらを）わが手に取った。民と軍はハンを喜ばせた。かようであると知れ、それは良いことである」⁽⁶⁾。つまり、オグズ・カガンの息子たちが狩りをして、その獲物を父に渡したことは、喜ばしいことであることを意味しているのである。

【伝承2】

英雄が見る夢は征服活動の予兆ともなる。セルジューク朝で知られるセルジューク家の祖アミール・セルジュークは、伝承によると100歳まで生きた。

ある日、夢の中で、草に小便をしていると、草から火花が散って、東へ西へはねていった。その夢について、夢占い師は、「あなたの子孫は、遠い国々を攻めて、その王となることでしょう」と告げた。⁽⁷⁾

このセルジュークは、言うまでもなく、西アジアを支配したセルジューク朝の始祖である。彼の孫トゥグリル・ベグは1038年、ホラーサーン地方を占領し、1055年にはバグダードに入り、スルタンとして正式に認知された。第2代スルタンのアルプ・アルスランの治世には、その勢力はアナトリア地方にまで及んだ。アナトリアのセルジューク朝はモンゴルの支配を受けるまで続く。セルジュークの子孫は、夢占いのとおり、広範な地域の支配者となったのである。オグズ・カガン伝承の中の夢で、金の弓が東西に及んだのとは異なり、小便が東西にはねたという点がユニークである。

ティムール朝を興したティムールについての伝承にも夢占いがあらわれる。ティムール (1336-1405) は、サマルカンドを首都に、マー・ワラー・アンナフル地方とホラーサーン地方を中心とする中央アジア最大の帝国を建てた。チングスの血を継がぬためハンには即位できなかったが、世界的によく知られた中央アジアの覇者である。

【伝承 3】

ティムールの母サクプジャマルは、彼を身ごもっているときに夢を見た。それは、その子が人間ではなくへびとして生まれるという夢であった。そのへびは母の目の前で大きくなり竜になった。そしてその竜はまず実の母を飲み込み、それから当時のシル川の統治者トカラクを飲み込んだ。身ごもっていた母はこの夢を、家にたまたま来客していた占い師の老婆に解いてもらった。老婆は裏切って、その夢についてトカラクに話してしまった。冷酷なハンは身ごもっている彼女を連れてきて、自らの手で腹を引き裂き、墓場に埋葬もせず捨ておいた。サクプジャマルの実の妹タキナは7か月間生きていたその子のへその緒を歯で切り、彼を引き取った。母の腹がナイフで切られたときに、赤子の右足が傷つき、それが原因で生まれつき片足が不自由であった。タキナはまだ16歳で、未婚の乙女であったのだが、乳房から乳が流れ、それで子どもを育てた。ティムールは生涯、タキナを母と呼んだ。⁽⁸⁾

夢で竜に飲み込まれたトカラクは、夢の解釈が現実になるものと信じ込んだため、先手を講じ、ティムールの母親を殺害したという伝承である。ここでは、一般的に知られているタキナは実の母ではなく、その姉が実母であったとしているが、史実ではないだろう。また、トカラクなる人物が誰かは不明だが、モグーリスターンのトゥグルク・ティムール・ハン（在位1347-62）を指しているかもしれない。ティムールは実際、右足に障がいを持ち、不自由であったが、この伝承では、その理由を、母が腹をナイフで切られた際の怪我だとする。これから生まれる子どもが将来の征服王になることは、別の表現でも夢に現れる。

【伝承 4】

バルラス族出身のシャフリシャブズの統治者タラガイは夢を見た。夢では、高い山の頂に立っていた。真っ暗闇の夜であった。タラガイの手には金剛の剣があった。そのとき、その剣から稲妻の光が輝き、地上が明るくなった。タラガイは目覚めた。その夜、白装束に白いターバンをかぶり、白馬に乗った人物がこの夢を解いた。「タラガイよ、いまおまえの妻タキナが男の子を生む。その子は、将来世界を支配する征服者となるう」と。その人はヒズルであった。その解釈が翌朝、カザガン・ハンの耳にも届いた。将来の征服者が生まれたことに震え上がり、家来に命じて、タラガイの不在時にその妻の腹にいる子どもを殺すため、大きな石を用意させた。しかし、その子は死なず、無事に誕生した。だが、石の重さで彼は片足が萎えてしまったのだった。⁽⁹⁾

【伝承 3】とは異なり、ティムールの足はナイフではなく重い石によって不自由になったとしている。文中のタラガイとは、バルラス部族出身の、ティムールの父アミール・タラガイである。カザガンは、実際はハンではなく、チャガタイ・ウルスの有力者であった。

彼とその一族は、チンギスの子孫をハン位につかせて、傀儡として実権を握っていた。カザガンは、未来の征服者を恐れて、ティムールを殺そうとするが、失敗する。なお、ティムールの父タラガイの立っていた高い山の頂や手にしていた剣については、のちに第5章で改めて取り上げることにしよう。

さて、【伝承4】で注目したいのは、彼に助言を行ったヒズルについてである。ヒズルは、中央アジアや西アジアの伝承における伝説的な人物で、偶然、「生命の泉」の水を飲んで、不死となったという。弱者や迷い人の前に現れて、窮地を救う庇護者として知られる。人々に幸福や財を与えるともいう。テュルク世界では、ヒズルはイリヤスの名で現れることもあり、「ヒズル・イリヤス」と並記されることもある。ヒズルは40人のシルテン（守護者）を従えるとも伝えられる⁽¹⁰⁾。ヒズルと明示されない場合でも、民間伝承の夢の逸話に登場する老人はヒズルをイメージした人物であることが一般的である。

【伝承5】

タラガイの二番目の夫人タキナ妃はティムールを身ごもっているときに夢を見た。夢では、ヒズルのガリ・アッサラムに子どもを求めていた。聖者は彼女に、肉体は石で、心はこの世でもっとも繊細な花でつくられた息子を与えた。乳を与えてもきちんと吸わない息子を母が抱きかかえていると、石からつくられたその体のため母は腕が痛くなって、泣いてしまった。母が泣くを見て、息子も一緒に泣いた。母子の目からは涙があふれて流れた。「どうだ、息子は気に入ったかな」と聖者が聞くと、母は答えた。「私にはこんな泣き虫の子どもは要りません。ほかの子どもをください」。そこで聖者は、今度は、肉体は花のように柔らかく、心は石のように硬い別の子を与えた。この子も母の与える乳をきちんと飲まなかった。母はその子を叩いた。しかしどれだけ叩いても、その子の目から涙は流れなかった。その性格に満足した母は笑いながら目を覚ました。翌日、タキナ妃の夢をある占い師の老婆に解いてもらった。「あなたが夢で泣いたら、現では喜ぶことですが、夢で喜んだのなら、現では泣くことになりましょう。最初の子どもには満足しなかったのですね。あなたの子どもは、体は弱いけれども、心は石のように硬いものとなるでしょう。夢とは反対に、あなたを泣かせることでしょう」と答えた。⁽¹¹⁾

この伝承でも、現れた聖者はガリ・アッサラムなるヒズルである。子どもの体の弱さとは、ティムールの右足が不自由であったことを指すのであろう。この伝承では、謀略によってではなく、強い心と引き換えに先天的に不自由な体で生まれたとされる。体が石のように硬く強い子どもではなく、心が石のような硬さをもつ子どもが生まれ、その石のような心のために母は現実で泣くと予言される。ティムールの征服者としての冷酷な側面を強調した伝承といえるだろう。

【伝承 6】

次は、遊牧勢力ノガイ・オルダを創始したエディゲの見た夢である。15-17世紀に中央ユーラシアの草原地域に権勢を誇ったエディゲ（1352頃-1419頃）は、ティムールの援護を受けながら草原の覇者となった⁽¹²⁾。彼の夢について、英雄叙事詩『エディゲ』から引用しよう。

エディゲはある日、夢を見て、驚いて目覚めた。「おい、17人の友たちよ、吉兆だ！ 立ち上がり、服を着よ、帯をきつく締めよ。手と顔を洗え。私は今宵夢を見た。善なる夢ならば善に占え、悪なる夢ならば悪に占え。近寄ってこの18人の武士を守るように。今日見た夢で、私は黄金の鞍の白灰色の馬に鬣をなびかせて乗っていた。私は白いハヤブサになった。天に向かって飛んだ。天で舞っている天使たち、彼らとともに話した。そこからさらに飛んだ。丘を飛び交う茶色いガチョウ、それらを天でとらえた。山の頂に降り立ったのだ。胸肉をたらふく食べた。これらはいったい何を意味する、17人の盟友たちよ！」

17人の友が集まった。集まり互いに困ってしまった。何の答えも見つからず、みなただ立ち尽くすのだった。一人の賢者は理解した。彼らの中の長老だった。「黄金の鞍の白灰色馬、あなたがそれに乗ったなら、希望が叶うということだろう。天に向かって飛んだなら、民の前に現れるということだろう。天を舞う天使と出会い、話をしたというならば、勇士たちが支えるということだろう。そこからさらに飛んだなら、ヒズルが支えてくれるのだろう。丘の茶色いガチョウを、天でとらえたというならば、山の頂に降り立ったならば、胸肉をたらふく食べたならば、かつてあなたを故郷から追放したトクタミシュを、やつをあなたはきつと破り、ついでにみなながら満足することだろう」。⁽¹³⁾

エディゲの夢はヒズルの支援を受けて、トクタミシュに勝利することを意味すると賢者は解釈した。果たしてその解釈のとおり、エディゲは14世紀末、数回にわたる会戦でトクタミシュを破り、彼に替わって草原の支配者となる。この伝承でも、ヒズルがエディゲを支えると予言される。

【伝承 7】

エディゲの時代から下った16世紀のクリミア・ハン国の王子アディル・スルタンを歌った叙事詩にも夢占いの場面があり、物語における重要な役割を果たしている。クリミア・ハン国の皇帝デヴレット・ギレイ（在位1551-77）の子アディル（1579年没）は、オスマン帝国皇帝の命令を受け、故郷を遠く離れ、サファヴィー朝と戦っていた。当時、クリミア・ハン国はオスマン帝国の保護下にあったためである。北カフカースのノガイに伝わる叙事詩では、アディル・スルタンは戦いに疲れ、ひと休みするため一人で横になり眠ってしま

う。すると、敵が彼を取り囲み、捕らえて、殺してしまった。その日、アディル・スルタンの母は夢を見て、その夢の解釈を占い師に依頼する。

「ああ、占い師よ、占う者よ、占っておくれ、見ておくれ。今晚、私は夢を観た。非常に悪い夢を観た。占い師よ、我がアディルについての解釈を！」その夢の内容は次のとおりである。「我がアディルが乗った蒼き馬の下に人が現れたのが見えた。勇士の望みの二本の足を伸ばしているのが見えた。勇士の力の二本の腕を曲げているのが見えた。勇士の二つの瞳の明かりが輝いているのが見えた。雌馬から生まれた仔馬の尻尾が短かったのが見えた。病気になった不妊の雌馬が屠られ、重い鍋が用意された。」。

この夢にたいして、占い師は次のように解釈して、アディルの母に伝えた。

「アディルが乗った蒼き馬の下に人が現れたのは、(その馬を) 乞うて乗っていること。勇士の望みの二本の足を伸ばしているのは、足を伸ばして寝ていること。勇士の力の二本の腕を曲げているのは、腕を曲げて寝ていること。勇士の二つの瞳の明かりが輝いているのは、眠っていること。病気になった不妊の雌馬が屠られたのは、クズルバスが屠ったこと。重い鍋が用意されたのは、彼ら (アディルたち) のために用意されたということ。アディルはあなたの強靱な戦士、(敵の) クズルバスの軍隊を打ち砕いたのではないか？ 彼が勝利を喜んで、トイ (祝宴) を行うのではないか？」。

しかし、この解釈は正しいものではなかった。悲報をアディルの母に伝えて、悲しむことがないように、配慮した結果の偽りの解釈だったのである。アディル・スルタンの母が家に帰ると、残った者たちに、占い師は夢の正しい解釈を語った。

「アディルの蒼き駿馬の人の下に見えるのは、その駿馬をクズルバスたちが連れ去っていったことである。そしてアディル・スルタンを深い穴に投げ込んだのだ。アディル・スルタンの手が曲っているのが見えるのは、二つの腕が尺骨から切られたということである。両足が伸びているのは、膝から二本の足を切られたということである。両目が輝いているのは、アディルの二つの目がくり抜かれたということである。」。(14)

占い師のこの占いの後、アディルの死の知らせが故郷に届く。人々は集まって、不妊の雌馬を屠り、その肉を重い鍋で調理し、悲しみの宴を行って、アディル・スルタンの死を悼んだというエピソードで叙事詩は終わる。この例では、「夢」を見るのは、主人公ではなく、その母である。母は夢の解釈を占い師に頼むが、占い師はあえて真実を隠し、当たり障りのない解釈を聞かせ、安心させて帰す。しかし、占い師は事実を、夢を通じて正確に理解していたのであった。アディルは敵に殺されていたのである。実際、アディル・スルタンは1579年に捕らえられ、その後客死している。この夢解釈の伝承は、史実に基づいて語り継がれたものである。

【伝承 8】

さらに時代を下りた 18 世紀のカザフ・ハン国の名君アブライ・ハン（1711 頃-81）も夢を見て、それを解釈させたと伝わる。

ある日、アブライは家で寝ているときに夢を見た。その夢をブカルに解いてもらった。その夢では、キブラ（メッカの方向）に向かって歩いていると、高い天空にそびえるバイテレク（聖樹）があった。広大な草原のその樹のところに行ってみると、根元にトラがいた。そのトラはアブライを見るなり、飛びかかってきた。アブライも虎に飛びかかり、手にした短剣で腹を切って殺した。その腹の中からオオカミが出てきて、それとも格闘となった。アブライはこれにも勝利して殺した。その腹の中からはキツネが出てきて、それとも戦った。その中からはウサギが出てきた。その腹を裂くと、そこからはイタチが出てきて、それとも戦った。その腹を裂いてみると、褐色のネズミが出てきた。これがアブライの見た夢であった。

ブカルは将来とアブライの子孫のこととして、次のように占った。

「バイテレクを見たということは、ご自身の現世でのハン国の幸福でございます。トラのような威風であり、閣下の素晴らしい時代であるということです。閣下のご子息はクマのようになって、このハン国の玉座に座り、閣下のように、カルマクをはじめ敵にクマのように攻め入るということでしょう。その子らはオオカミのようになります。そののちの人々はキツネのように互いをだまし合い、欺き、邪悪な時代となりましょう。そのあとの人々にとっては、恐れたり脅えたりする、強欲で孤独な狭苦しい時代となりましょう。その次の時代の人々は褐色のネズミのようになって暮らす、そんな時代となりましょう。時間の終わりが近づいたときを、人間が迎えるときはイタチのようになることでしょう。最後にはネズミになって、この世界は終わってしまうのであります」。

ブカルは夢の解釈をすると、アブライはこの言葉を聞いて、サマルカンドへ使者を送った。「争うこと、戦うことはない」とのアブライ・ハンの言葉を聞くと、サマルカンド市民は喜び、心が静まった。⁽¹⁵⁾

アブライの夢解釈を行ったブカルとは、ブカル・ジュラウとして知られる、アブライ・ハンの助言者・側近である。彼は、ジュラウ、すなわち、詩の語り手であるとともに、為政者にたいして助言するブレンでもあった。ブカルはアブライにロシアと戦わぬよう助言したことで有名である。彼の解釈と助言によりアブライはサマルカンドへの攻撃を思いとどまったとされる。だが、アブライが見た「だまし合い、欺き、邪悪な時代」と、そのあとの「恐れたり脅えたりする、強欲で孤独な狭苦しい時代」とは、のちの帝政ロシア時代やソビエト時代のカザフのあり方を予言しているかのようである。アブライ亡き後のカザフ・ハン国は分裂に等しい状態となり、ロシアに併合され、さらにソビエト時代には、大

肅清や強制定住化政策で多くのカザフ人が命を落とした。

アブライが見たバイテレクとは、中央アジアでは、世界樹・生命樹として広く知られる聖樹のことである。伝承では、この木の頂きは天界にまでおよび、聖鳥が営む巣があるという⁽¹⁶⁾。ここでは、バイテレクがカザフ・ハン国の幸福を意味すると占われている。

以上、歴史的英雄たちの夢にまつわる伝承を8つ見てきたが、基本的に本人や父母、側近が夢を見て、目覚めてから占い師や賢者に解釈をしてもらうパターンである。夢は基本的に正しく解釈され、現実もおおむねその通りになる。夢を通じて、異界たる夢の世界とこの現実の世界とをつなぐ賢者や聖者はシャマン的な機能を担っているともいえよう。

2. 夢と英雄叙事詩

英雄叙事詩に、夢のモチーフは不可欠である。物語を展開させる「夢」は、主人公自身や主人公の家族、愛馬、敵の勇士などさまざまなキャラクターが見るものである。ウズベクの民間叙事詩では、夢に関係するモチーフは、結婚・試練・誕生・援助者・危険・再生・帰還・子どものいないこと・旅行・死であり、結婚や試練、誕生、援助者が多いという⁽¹⁷⁾。とくに英雄叙事詩において印象的な「夢」は、子宝に恵まれない老夫婦の夢に聖者が現れ、子どもの誕生を予告するものであろう。夢のモチーフがある英雄叙事詩は枚挙にいとまがないが、ここでは『アルパムス・バトゥル』の系統の一連の叙事詩から、その実例を見ていきたい。まずは、カザフに伝わるヴァリエーションから引用しよう。

横になった老婆は夢を見た。夢で老人が夢枕に立った。「四十与えようか、一つ与えようか?」と尋ねた。老婆は「たった一人で結構でございます」と答えた。「子どもが生まれましたら、白い杖をついた老人が現れ、その名をつけるであろう」といった。そして消え去った。目覚めるとそれが夢であるとわかった。喜んで、夫を起こした。「その夢ならわしも見た」とバイボル。喜んで、帰宅した。九か月と十日で男の子が生まれた。それから一年経って、女の子が生まれた。あの夢の老人が現れて、アルパムス・バトゥルと命名し、祝福した。その老人はヒズルであり、やがて消え去った。⁽¹⁸⁾

ここでもヒズルが登場して、主人公の誕生を予告するとともに、現の世界にも出現して、主人公の命名をするという重要な役割を果たしている。主人公が夢のお告げのとおりに生まれる、神の申し子であることは、英雄となる条件のひとつにもなっている。

カザン・タタールに伝わる『アルパムシャ』では、主人公が見た夢を老婆に解釈してもらい、妻の懐妊を知る。

アルパムシャは夢を見て、慌てて目覚めた。夢の中で、ハトを見て、ハトを素手でとらえたときに目が覚めた。老婆に尋ねた。「私は夢を見ました。夢ではハトを捕まえた

のです。これはいったいどういう意味でしょう？」と、老婆は、「あんたの奥さんは子を宿したようだ。その子は男の子であろう」⁽¹⁹⁾。

この老婆は、占い師として登場するわけではないが、その役割は夢占い師そのものである。夢により懐妊が知らされるのは、アルパムスの誕生を告げる例と同類である。

主人公の親だけでなく、主人公の好敵手も夢で予見する。ウズベクの『アルパミシュ・バトゥル』の例を見よう。

カルマクの勇士カラジャンが待ち受けていた。カラジャンは、40 チルテン（守護者）が見せた夢の中でアルパミシュを見て、自分よりも勝ることを知り、彼と友人となることを考えていた、という。そして、カラジャンは、ムスリムになり、アルパミシュをユルタ（天幕）に招き、もてなした。⁽²⁰⁾

40 チルテンとは、聖者・援助者で、ヒズルに従って登場することもある。人々を苦しみや災いから守り、幸運をもたらす庇護聖者ガイブ・エレンと並び称されることもある。その力によって、のちに親友となるアルパミシュとの出会いを予知するのである。

『アルパムス』のカラカルパクのヴァリエーションでは、主人公の盟友が眠っているときに、聖者が夢に現れ、目を覚めさせる。カラジャンの乗るバイシュバルは、コングラトの聖者ジャユルガンの助力で駆け抜けた。カラジャンはよく眠る人物で、一度寝ると七日間寝続ける。眠っているときに、カラジャンは手足を縛り上げられた。すると、夢枕にジャユルガン・ババが現れて、カラジャンを起こす⁽²¹⁾。聖者の助けによって、カラジャンは危機を脱するのである。

そして、アルタイに伝わる『アルプ・マナシュ』では、主人公の愛馬さえ夢を見る。その夢の内容は次のごとくである。

アク・ボロ馬は夢の中で、名馬の力がみなぎった。

勇士アルプ・マナシュを地下牢から救い出す、その方法を夢で見た。

大地と天が重なる場所で銀灰色馬を飼うキュレル・バイ・カーンの国がある。

カーンの宮殿のそばに三つの金の山がある。

その山のすそ野には三つの聖なる湖がある。

その真ん中の湖には馬頭の大きさの金の泡が、昼も夜も湧いている。

その泡をつかむと、消えそうな炎も燃え上がる。

死にそうな若者も元気になる。すべての力が満ち溢れる。

そんな夢を見たあと、アク・ボロ馬は目が覚めた。

夢を見たアク・ボロ馬は、大地と天が重なる場所へ鳥のように飛んだ。⁽²²⁾

そして、夢で知った方法で名馬は主を地下牢から見事救い出すのである。夢が主人公のピンチを救う典型といえよう。

このように『アルバムス』の一連の伝承では、未来や遠い場所での出来事、難題の解決策は夢によって知らされる。英雄叙事詩においても、夢が重要な情報を知らせるが、こうした夢のモチーフは、主人公の霊性と超自然性を効果的に表現している。主人公の英雄ではなく、親や盟友、愛馬など、主人公の近親者であることが多い点も英雄叙事詩における夢の特徴である。

3. 夢と昔話

著名な歴史的人物の伝承や英雄叙事詩とならんで、昔話にも夢を取り扱うものが少なくない。そして、夢のあり方や意味もヴァラエティに富んでいる。たとえば、カザフの昔話『ジェルキルディク』では、二人の娘が見た同じ夢を見る。

その昔、ヌルマンベトというハンがいた。ハンは192歳で、アズテミルという弟がいた。アズテミルは42人の兵の長であった。ヌルマンベトには二人の娘がいた。ひとりにはクニケイ、もう一人はティニケイといった。二人は眠っているときに同じ夢を見た。朝になり、「夢を見ました。火が燃えていました。滴り落ちる血を見ました。この夢を占ってください」とバクス（シャマン）や長老、頭にターバンを巻いた賢者たちに頼んだ。彼らは「今日、あなたのおじさんが戦利品をもって戻ってきますよ」と解釈したが、二人はそれを信じなかった。ヌルマンベトは死を覚悟し、涙した。やがて、敵が来て、ヌルマンベトの首を取った。アズテミルが戻ると、そこにはもう誰もいなかった。そして眠ったアズテミルは夢の中である人物に会った。彼はアズテミルに言う。「サルバイというハンがいる。彼には、まだ名前もついていない息子がいる。おまえが取るべき仇はそれだ。夢に現れたのはクドゥル（ヒズル）であった。アズテミルはサルバイを探す旅に出た。⁽²³⁾

この昔話では夢が物語の鍵となっている。二人の娘が同じ夢を見、それをシャマンや賢者が解釈するが、その解釈は正しくない。それは父や自分の国に降りかかる災いの前兆であることを二人の娘は感じ取っていたのである。そして、その予感は当たり、夢で見たような光景が広がる事態となり、敵に敗れてしまった。シャマンや賢者たちは、【伝承7】のアディルの母への虚偽の解釈のように、娘たちを気遣って、誤った解釈をしたのだろうか。だが、二人は正しい解釈を知っていたのである。

この昔話の興味深いことは、さらに夢の「お告げ」があることである。故郷が蹂躪され、家族をなくしたアズテミルもまた夢を見る。その夢には賢者ヒズルが現れ、彼にすべきことを教示する。そのお告げに従って、アズテミルは戦いの旅に出ることになる。ヒズルが

しばしば夢に現れ、助言を行うことは、すでに見てきたとおりである。

次に『夢を買ったタズシャ少年』を取り上げよう。

ある富者の使用人が夢を見た。頭から月が、足からは太陽が、心臓からは星が昇ったという夢だった。翌朝、牛飼いの少年にこの夢について話した。少年は、自分の牛と引き換えに、その夢を手に入れた。やがて少年は、頓智で妻とハンの娘と子どもを手に入れる。夢の中の、頭から出た月は妻を、足から出た太陽はハンの娘を、心臓から出た星は子どもをそれぞれ意味していた。⁽²⁴⁾

夢が売り買いされるといふ発想はたいへんユニークである。その夢は吉兆を知らせる夢であり、主人公は手に入れた夢のおかげで成功を収める。その所有権を変えられ、その「効能」は、見た本人ではなく所有者にあるという夢のとらえ方もおもしろい。

カザフの『夢を見た皇帝』では、主人公が皇帝の夢を探しに行く。

ある皇帝が民を集めて、「余は夢を見た。誰かどんな夢を見たか、それを見つけることができるなら、その者に1000ティッリヤ（金貨）を与えよう。だが、その夢を見つけようとして金だけもらって、それが見つけられなかったら、その者の首を落とすぞ」という。悪妻にそそのかされた、ある男が金をもらおうが、その夢を見つけられずに、皇帝のもとから逃げようとする。すると、一匹のヘビが現れ、その夢は、たくさんのオオカミが互いに噛み付き、食べているということを教えてくれる。皇帝にこれを伝えると、そのとおりであった。皇帝はまた別の夢を見たので、それを見つけよと命じる。再び、男は逃げようとするが、またヘビが現れて、次の夢は、キツネが互いにだまし合って、うそをついているということを教えてくれた。皇帝にこのことを伝えると、果たしてそのとおりである。皇帝はさらに新たに見た夢を探そう命じる。三度、ヘビが現れ、三番目の夢は、子どもたちが眠り、馬が休む、暴力のない穏やかな様子というものであると教えてくれた。1000ティッリヤの金貨をヘビに渡そうとすると、ヘビは人間の姿になった。「私は金貨などいらぬ。私はヒズルである」。そして、夢をこのように解釈した。「最初の夢は、皇帝が民をオオカミのように冷酷に治め、搾取するので、オオカミの夢となった。次の夢は、そのやり方を変えて、民をキツネのように狡猾に騙して治めたので、キツネの夢となった。そして最後に、それまでの圧政を改め、公正に治めるようになったので、三番目の夢を見たのである」と。男がすべてを皇帝に話すと感謝して、彼を大臣に任じ、以後公正な政を続けたという。⁽²⁵⁾

先の『夢を買ったタズシャ少年』は夢の取引を扱っていたが、この話は夢を探すというものである。夢の内容を言い当てるのではなく、どこかで見つけるという発想もおもしろい。その夢を見つけていたのはヘビの姿に化けたヒズルである。ヒズルは、夢が現実の政

を映し出すことを示し、皇帝を公正な政治を行うように導き、心を改めた皇帝を援助したと伝える。主人公に課せられた試練はヒズルによって無事に解決され、主人公は大臣になる。夢とヒズルの関係はやはり深い。

4. 夢と語り手

種々の叙事詩や民話、伝承を後世に語り伝えてきたのは、たくさんの語り手たちであった。夢のモチーフが大きな意味をもつ叙事詩や伝説を伝えてきた語り手が、語り手になったり、志したりするきっかけもまた、しばしば「夢のお告げ」である。夢がきっかけで吟遊詩人になる、トルコの民話を紹介しよう。

クルバニーは兄に叩かれ、ワインを持ってくるよう言われた。ヴィランシェヒル⁽²⁶⁾の町に着き、三聖者の墓近くの泉の水を飲み、身を清め、礼拝をすると、眠ってしまった。「神様！私をあの狂った兄から自由にしてください！」と祈った。眠っていると、「目を開くのだ、クルバニーよ」と聞こえた。クルバニーが目を開くと、3人の聖者がいた。聖者は盃をワインで満たし、クルバニーに言った。「さあ、飲みなさい。これは愛のワイン（アシュク・シャラブ）だ。これは神の愛に捧げるのだ」。クルバニーは神の御名を唱えて、カップを空にした。すると、二杯目が勧められた。「これは預言者ムハンマドと12イマームに、聖人たちに、そして目には見えないガイブ・エレンの愛に捧げるのだ」。クルバニーは二杯目も飲み干すと、気分がすっきりした。聖者は鏡を持ってきて、クルバニーに、庭園、大きな宮殿と美しい娘を見せた。その娘はクルバニーに、「これを飲んで！あなたは吟遊詩人になるでしょう」といった。クルバニーは彼女の手からワインを取り、飲んだ。聖者は「これは罪だ。おまえには責任がある。だが、おまえが困難に出会ったら、いつでも私たちはおまえを助けるぞ」といった。娘を抱きしめようとして、クルバニーは目が覚めた。それらはみな夢で、娘ではなく墓石を抱きしめようとしていた。現実を目の当たりにし、気を失った。彼はそこで6昼夜を過ごした。クルバニーを夢で見た妊婦が、クルバニーに起こったことを彼の父に知らせ、クルバニーは家に戻された。母は、息子を悲しんで、サズを弾きながら歌った。そのサズの音色が耳に届くと、クルバニーは目を開き、母の手からサズを取り、歌い始める。それから彼は、詩をつくり、歌を歌ったという。⁽²⁷⁾

特別な夢を見る場が墓や泉のそばであることは、『アルパムス』の聖者廟と共通する。夢の中で出会った乙女から詩人になることを告げられる。夢であることに気づき、意識を失うが、目を覚ますのは、母の歌声と撥弦楽器サズの音色であった。この場面は「死と再生」を示し、甦った主人公は詩人になったというのである。

クルバニーは伝承上の人物であるが、ウズベクにも同じようなきっかけで語り手になっ

た人が実在する。

それまでは詩人の能力がなかった、ただの牧夫が木の下で眠っていると、夢に見知らぬ人が現れ、「おまえはバフシ（詩人）になれ！」といいながら、弦楽器ドンブラを渡し、歌を歌うよう命じる。夢の中で、ドンブラを弾きながら語る。目が覚めると、そばには誰もいないが、その時から詩人としての才能を身につけて、バフシとなった。⁽²⁸⁾

クルグズの英雄叙事詩マナスの語り手になる夢の例も見てみよう。

ある夏の夜、草の上に横になり眠った。夢で私は山道を馬で進んでいた。老人と一緒に became。大きなユルタに着き、その中に入った。そこには荒々しい容貌の人が座っていて、私は挨拶をしたが、答えはなかった。布団の近くにはクムズ（筆者注：馬乳酒）が入った容器があった。老人はそのクムズを私に注いでくれた。それを一息に飲んだ。「ここにいる男はマナスという。覚えておけ！」と老人は言った。それから別のユルタの中に入った。そこには白い顔の大きな目の格好のいい男が座っていた。私が再びクムズを飲むと、老人はその男の名前を言った。アラマンベト⁽²⁹⁾ といった。こうして老人は私に40のユルタを巡らせ、そのつど、一杯のクムズを飲んだ。私が目を覚ましたとき、すでに夕方であった。その日から、私は叙事詩を語っている。⁽³⁰⁾

夢に導く人（聖者、老人）が現れ、その人物に従って酒（ワイン、クムズ）を飲み、目覚めてのち、詩人や語り手になるという流れは、クルバニーとマナス語りとでまったく同様である。英雄叙事詩の主人公の誕生が、夢の中の聖者や老人によって知らされるように、聖者や英雄たちによる「夢のお告げ」によって詩人や語り手になることも、それが運命的なものであることを強調している。

なお、夢に聖者や英雄が現れ、それがきっかけで語り手になったという例と同様に、夢に死んだシャマンが出てきて、お告げを受け、シャマンになったという例がある。

シャマンであるバトゥルハンは、幼少期にジン（悪鬼）の攻撃を受けた。28歳の時、重病になり、「狂気」が彼を山登りに駆り立てた。何日も眠れず、裸足で凍った湖を歩き、そして強くなった。のちに、偉大なシャマン、クセインと出会い、彼から祝福の言葉を与えられ、精神世界に誘われた。バトゥルハンはこの出来事をシャマンの歌で語った。老シャマンは彼に弦楽器ドンブラを与え、それによって精霊たちと邂逅できるようになったが、彼はその数日後に突然死去した。死後、バトゥルハンはその老シャマンを夢で見ようになり、そこで老シャマンは巫術を助ける魔法の斧を見つけるように命じた。バトゥルハン、ムッラーが隠しておいたにもかかわらず、それを偶然発見した。その後、バトゥルハンの健康は改善し、シャマンとなった⁽³¹⁾。

夢で与えられた、魔法の斧を見つけるという難題を課し、それをこなしたことで病気が治癒し、シャマンとなったというのである。まるで語りのストーリーそのものであるが、重病を克服し、シャマンとして「再生」したことは、吟遊詩人に「再生」したクルバニーとよく似ている。エリアーデは、疾病、夢想、およびエクスタシーは、シャマンの状態に到達する多くの手段であると述べている⁽³²⁾。シャマンになるための入巫儀式とテュルク口承文芸における夢のモチーフとの著しい類似性は、シャマンの入巫儀式が、長い時間をかけて夢のモチーフへ変わったためであるという指摘がある⁽³³⁾。

シャマンになる素質があるか否かも夢が知らせる。それは、鍋の中で茹でられ、見知らぬ人々に刻まれて、体の中に「余分な骨」がないかを探られるという夢である。その骨が見つかり、夢を見た人にシャマンの能力があることを意味するという⁽³⁴⁾。夢は、語り手やシャマンも生み出す役割をもつのだ。

5. 夢占い

夢をどのように解釈するかということは、古来の大きな問題であった。歴史的な英雄が見た夢の例や夢解釈をテーマにした昔話の実例は上述のとおりであるが、一般の人々もまた、自分が見た夢をどのように理解すべきか、大いに気になる問題であったことだろう。自分が見た夢をその都度、シャマンや賢者に解釈してもらうわけにもいかぬことから、夢占い・夢解釈の典型的な例は民間には広がり、口承文芸の一ジャンルとして発展してきた。夢占いは、こうして口承で民間に伝えられてきたが、近年では、それらは書籍として出版されている⁽³⁵⁾。中央アジア各国では独立後、夢占いにかんするさまざまな書籍が出版された。代表的なものは、1992年にカザフスタンで出版された『夢予言』Түс аянである⁽³⁶⁾。同書は、100冊からなる口承文芸のテキスト資料集「祖先の言葉」シリーズの第94巻「夢占いや夢解釈」にも取り入れられている。この章では、口承文芸のジャンルとしての「夢占い」を見ていきたい。

『夢予言』では、たとえば、「夢で泣いたら、現では喜び」⁽³⁷⁾とされるが、これは第1章で取り上げた【伝承5】での古い師の「あなたが夢で泣いたら、現では喜ぶことでしょう」と同じ解釈である。ティムールにまつわる夢を「夢占い」の解釈と照らしてみよう。【伝承4】で、統治者タラガイは高い山の頂にいる。高い山にいるという夢は、夢占いでは、「夢で高いところ、あるいは山に登ることは、いいことである。そのような夢を見た人は現実で大きな地位に達する」⁽³⁸⁾、あるいは「あなたが山に登ったら、地位が上がる」⁽³⁹⁾と、社会的に高い地位にあると解釈される。また剣を手にもつことについては、「夢で剣や銃を見たりもったりしたら、利益を得て、富を成す」⁽⁴⁰⁾、「夢で剣を装備するのを見たら、大きな調子にのる徴」⁽⁴¹⁾とあり、タラガイの統治者としての位置を示している。しかし、その剣から光が出て、闇夜を明るくする。この光は将来生まれるティムールを意味している。

最高の地位にある統治者を超える人物を光が象徴しているのである。先に見たエディゲの夢占いにおいても、「山の頂に降り立つ」ことが、仇敵トクタミシュを打ち破ることだと解釈されている。「夢で高いところに上ったら、その人は現実では高位の任務に就く」⁽⁴²⁾ という占いがあるが、エディゲの勝利と統治者になることが高みにあることで示されるのである。

また、エディゲはハヤブサになって、ガチョウを捕らえて食べたという夢を見たが、夢占いでは、「鳥を捕まえた人は、財産をもち、こどもを望む」⁽⁴³⁾ と、成功の予兆と解釈される。なお、エディゲの夢と、第1章でも取り上げた、9-10世紀ころに敦煌・千仏洞で発見された『占いの書』に見られる占いと類似を、ここで指摘しておきたい。『占いの書』には、「私は白い首の灰色のハヤブサだ。見晴らしのいい断崖にいる。かようであると知れ、それは良いことである」⁽⁴⁴⁾、「私は白い斑点のあるハヤブサだ。白檀の木の上において喜んでいる。かようであると知れ、……」⁽⁴⁵⁾ との項目がある。これは、先述のエディゲの「私は白いハヤブサになった。山の頂に降り立ったのだ」という言葉と類似する。白いハヤブサのシンボリズムが明らかである。『占いの書』は世俗的な占い需要のためであったと考えられるが⁽⁴⁶⁾、千年以上前の占い書の内容は、口承で英雄叙事詩の中にも生きていたのである。

先に見たカザン・タタールの『アルパムシャ』の、ハトの夢が子どもの懐妊の兆しであったという例のように、鳥は吉兆と占われるものが多い。ハトのほかにも様々な鳥が吉兆とされる。たとえばカッコウについては、民間伝承では「夢でカッコウを見たら、ないものが整い、利益を得るだろう」⁽⁴⁷⁾ とある。これと同様に『占いの書』でもカッコウは「若者がカッコウの尾を見つけた。それを飾った娘に幸あれ。かようであると知れ、それは良いことである」⁽⁴⁸⁾ とよいことと解釈される。

蛇や竜の夢は、先に見たティムールにまつわる夢のように、強さや威厳の象徴と解釈されることが多い。たとえば『夢予言』には、「夢で竜を見た人は、力強い指導者に会う」⁽⁴⁹⁾ とある。また「自分が竜になった夢を見た人は長生きをする。竜の肉を食べたら、財産を得る」⁽⁵⁰⁾ とも解される。その一方で、「多頭の竜を見たら、それぞれの頭が災難であることを知らせている。病人が夢で竜を見たら、よくない。女性が夢で竜を見たら弱い子が生まれる。なぜならば、竜は地面を這いずるからである」⁽⁵¹⁾ ともあり、善悪双方の特徴をあわせもっている。

またヘビについても、「ヘビを見たら、近く喜びを享受する」⁽⁵²⁾、「どのような害もなければ、夢にヘビを見ることもよろしい」⁽⁵³⁾ とよい徴とされる。昔話『夢を見た皇帝』では、ヒズルが化けたヘビが主人公に助言をするが、このヘビは善なる援助者との位置づけである。それにたいして、「ヘビの夢を見たら、苦しみ、友人の裏切りがあるかもしれない」⁽⁵⁴⁾、「夢で白いヘビを見ても黒いヘビを見ても、敵が現れる」⁽⁵⁵⁾ とよくない兆しともされる。『占いの書』には、「私は黄金の頭のヘビである。黄金の私の腹を刀が切って、私の体は道に横たわる。私の頭は家に残る。かようであると知れ、それは悪いことである」⁽⁵⁶⁾。この

文章の真意はわかりかねるが、ヘビが悪い占い解釈に取り上げられている例である。このように、竜とヘビには、善の象徴性が明白な鳥とは異なり、善と悪、二つの相反する特徴が見られるのである。

鳥は天上界の、ヘビ・竜は地下界のそれぞれ象徴であるが、これは天上・地上・地下の三界が重なるように存在するという垂直多層的な世界像に基づいている。この世界観は、テュルクの神話的世界の基層をなしていると考えられ、これに基づいた鳥とヘビ・竜との対立関係が神話・伝承の軸となることが多い。『占いの書』には、「白馬が敵を三界 (üç bolur) で見つけて平伏し祈るように導いた。恐れずによく祈れ。怖がらず願えと。かようであると知れ、それは良いことである」⁽⁵⁷⁾ とあり、おそらく天界・地上界・地下界を指す「三界」が現れる⁽⁵⁸⁾。ちなみに、この項の白馬は、アルタイの英雄叙事詩『アルプ・マナシュ』で天界と地上界を往復する主人公の愛馬アク・ポロ (白灰色の意) を彷彿させるものである。『占いの書』に登場する神について付言すれば、天上界の神テングリ Täŋri と地下界の悪神 Ärkliŋ である。これはテングリ信仰にもとづくものだが、『夢予言』などのイスラーム化以降の夢解釈には、預言者ムハンマドやクルアーン (コーラン)、マッカ (メッカ)、アズライル (天使)、アダムも現れるなど、当然のことながらイスラームの要素が強い。

口承文芸テキスト資料集「祖先の言葉」シリーズの第94巻には、夢占いや夢解釈の実例が数多く (1832例) 収録されているが、それらは古来のアイテムのみならず、現代的なアイテムも夢解釈の対象として取り入れられている。たとえば、「もしも自動車で逃げたら、道中、見たくないものがあることを (夢は) 知らせている」⁽⁵⁹⁾、「アルバムを見ることは、新しい知り合いの徴」⁽⁶⁰⁾、「アイスクリームを見たら、幸運に出会うかもしれない」⁽⁶¹⁾、「銀行を見たら、支出がある」⁽⁶²⁾、「電話……始めた仕事の障害となる人と出会うだろう」⁽⁶³⁾ などである。これらの具体的な採録の過程は明示されていないが、現代的なアイテムも「権威ある」資料集に収録されているのである⁽⁶⁴⁾。

おわりに

この論文で明らかにした、テュルク口承文芸における夢のモチーフの特徴について、まとめてみよう。

まず、テュルクの民間伝承では、歴史的な英雄にまつわる夢は、誕生や武勲、死去について告げる。その際、夢の中にヒズルやそれに準ずる聖者・賢者が現れることもある。それらは側近や夢占い師、長老によって解釈される。英雄叙事詩では、英雄の誕生やその登場、難問の解決方法を、その家族や関係者、愛馬が夢を通じて知る。昔話のジャンルでは、夢を売買したり、見つけたりするという行為も見られる。また、語り手になるきっかけに、夢のお告げがあることがわかった。シャマンも同様な夢を見て成巫するが、夢のモチーフはシャマンの入巫儀式に由来するとの指摘もあり、語り手とシャマンとの関係の深さが改めて確認できる。そして、夢では、山や鳥、ヘビや竜などがしばしば解釈のための重要

なアイテムとされ、民間伝承のストーリーにも登場する。夢解釈はテュルク口承文芸の一ジャンルを成し、現在でも人々のあいだで利用されている。夢のモチーフは、テュルク口承文芸研究において、引き続き注目すべきテーマである。

— 注

- (1) *Başkört halkı ijađady 2: Rıyüýtter, legendalar, Öfö*, 1997. この伝承によれば、移住の「先頭 bash」に「オオカミ qort」がいたため、バシュコルト bashqort と称したという。
- (2) 「偉大なるテュルク」の意か？
- (3) Bang W. ve Rahmeti G.R., *Oğuz Kağan destanı*, 1936, İstanbul, 29-31.
- (4) 中央ユーラシアの騎馬遊牧民に伝わる「三矢の遺訓」については、拙稿「中央ユーラシアと日本の民話・伝承の比較研究のために」『和光大学表現学部紀要』16号、2016年を参照。
- (5) 『卜占の書』を箴言の書、教訓の書と呼ぶべきだとの見解もあるが Кляшторный С.Г., Мифологические сюжеты в древнетюркских памятниках, *Тюркологический сборник 1977, 1981*, Москва, 125.、奥書に urq bitig、すなわち「予言・占い urq の書 bitig」と明記されていることから、これは占いの解釈の手引きと見るべきであろう。占い、もしくはさいころなどの道具を用いたものと考えられるが、その内容はテュルクの精神文化を知る格好の材料となる。占いは呪術・宗教的行為であるが、そこには当時のテングリ崇拝やシャマニズム的な世界観が映っている。
- (6) Малов С.Е., *Памятники древнетюркской письменности*, Москва, 1951, 84.; Hüseyin Namık Orkun, *Irk Biniğ, Eski Türk yazıtları*, 1987, Ankara, 90.
- (7) *Балалар сөзі 94: түс жору және ырымдар*, Астана, 2013, 171.
- (8) *Балалар сөзі 94*, 170.
- (9) Сонда, 171.
- (10) Сонда, 392.
- (11) Сонда, 171-172.
- (12) くわしくは、拙稿「英雄叙事詩が伝えるノガイ・オルダ」野田仁、小松久男編著『近代中央ユーラシアの眺望』山川出版社、2019年を参照。
- (13) *Ер Едіге*, Алматы, 1996, 69-70.
- (14) *Ногай халқ йырлары*, 1969, Москва.
- (15) *Балалар сөзі 94*, 167-168.
- (16) バイテレクについては、拙稿「英雄叙事詩とシャマニズム」『和光大学表現学部紀要』15号を参照。
- (17) Жаббор Эшонкул, *Ўзбек фольклорида туш ва унинг бадиий талқини*, 2011, Тошкент, 156.
- (18) 拙訳『アルバムス・バトゥル』平凡社東洋文庫、148-149 ページ。
- (19) 同上、208-209 ページ。
- (20) 同上、281 ページ。
- (21) 同上、276 ページ。
- (22) 同上、249-250 ページ。
- (23) «Желкілдек», *Ертегілер 4*, Алматы, 1989, 112-116.
- (24) «Түс сатып алған тазша», *Ертегілер 2*, 1988, Алматы, 134-138.
- (25) «Түс көрген патша», *Ертегілер 2*, 1988, Алматы, 245-248.
- (26) トルコ南部の町。
- (27) İlhan Başgöz, *Dream Motif and Shamanistic Initiation : Asian Folklore Studies No.1*, Reprint Series 17, Indiana University Asian Studies Research Institute, 1966, pp.2-3.
- (28) Жирмунский В.М., Зарифов Х.Т., *Узбекский народный героический эпос*, Москва, 1947, С.29-31.
- (29) アラマンベトは、『マナス』に登場する英雄。
- (30) Reichl, Karl, *Turkic Oral Epic Poetry*, 1992, pp.60-61. 語り手と夢については、拙稿「英雄叙事詩とシャマニズム 2」『和光大学表現学部紀要』19号 37-38 ページも参照。

- (31) D. Somfai Kara and others, Batırkan, a Kazakh Shaman from the Altay Mountains (Mongolia), *Shaman vol.14*, 2006, Budapest, 118.
- (32) ミルチア・エリアーデ『シャーマニズム上』ちくま学芸文庫、88 ページ。
- (33) İhan Basgöz, *Dream Motif and Shamanistic Initiation*, 5. なお、語り手とシャマンとの関係については、拙稿「英雄叙事詩とシャーマニズム 2」『和光大学表現学部紀要』19 号を参照。
- (34) シャルル・ステパノフ、ティエリー・ザルコンヌ『シャーマニズム』創元社、42 ページ。
- (35) またウズベキスタンでは、たとえば、7-8 世紀のムハンマド・イブシ＝シリシが行ったという夢解釈をまとめた書物が出ている。Тухи таъбирлари: Туркий, Тошкент, 2002.
- (36) *Тус аян*, Алматы, 1992.
- (37) *Тус аян*, 6. ; *Балалар сөзі 94*, 147.
- (38) Сонда, 5.
- (39) *Балалар сөзі 94*, 144.
- (40) *Тус аян*, 6.
- (41) *Балалар сөзі 94*, 133.
- (42) *Тус аян*, 7.
- (43) *Балалар сөзі 94*, 129.
- (44) Малов, С.Е., *Памятники древнетюркской письменности*, 84. Токболат Еңсегенұлы, «*Ырқ бітігі*», 2012, Алматы, 134. Hüseyin Namık Orkun, Irk Biniğ, 74.
- (45) Малов, С.Е., *Памятники древнетюркской письменности*, 84. Токболат Еңсегенұлы, «*Ырқ бітігі*», 134. Hüseyin Namık Orkun, Irk Biniğ, 74.このあとの文言は欠落しているが、おそらく「それは良いことである」と続くのだろう。
- (46) 池田哲郎「古代トルコ語の古い文書 (Irq Bitig) に就いて」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』6 (1)、1984 年 84 ページ
- (47) *Тус аян*, 13.
- (48) Малов, С.Е., *Памятники древнетюркской письменности*, 81. Токболат Еңсегенұлы, «*Ырқ бітігі*», 2012, Алматы, 130,139. Hüseyin Namık Orkun, Irk Biniğ, 74.
- (49) *Тус аян*, 10.
- (50) *Балалар сөзі 94*, 48.
- (51) Сонда да.
- (52) *Балалар сөзі 94*, 109.
- (53) *Тус аян*, 6.
- (54) *Балалар сөзі 94*, 109.
- (55) Сонда, 148.
- (56) Малов, С.Е., *Памятники древнетюркской письменности*, 80.
- (57) Там же, 84.
- (58) üç bolux を「三界」とは解釈しない考えもあるが、マロフ Малов, *Памятники древнетюркской письменности*, 84 や池田 (「古代トルコ語の古い文書 (Irq Bitig) に就いて」107 ページ) と同様に「三界」と解した。Gerard Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*, Oxford, The Clarendon press, 1972, 336 では bolux を‘a state of (coming into) existence(?)’としている。
- (59) *Балалар сөзі 94*, 78.
- (60) Сонда, 50.
- (61) Сонда, 58.
- (62) Сонда, 60.
- (63) Сонда, 145.
- (64) このほか、『夢占い (ムスリム用)』*Тус жорулар*, 2011, Алматы の内容は、『祖先の言葉』94 巻には収録されていないが、サッカーや写真など現代的な項目も含み、現代の夢解釈の資料として参考になる。